



日中両言語における呼称表現についての対照研究

著者	劉 寧
号	28
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第517号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00120442

[博士論文要旨]

日中両言語における呼称表現についての対照研究

東北大学大学院文学研究科・言語科学専攻

劉 寧

呼称は人々が日常生活のなかでコミュニケーションをする時の架け橋であると同時に、ひとつの民族の文化習慣や言語使用を表す言語行動である。呼称の研究は社会言語学における重要な構成要素の一つである (Philipsen and Huspek 1985)。呼称に関する先行研究では、鈴木 (1973)、国広 (1990)、祝 (2013) 塚田・尾崎 (1998)、曹 (2000) などは呼称の定義、種類やその使用実態、使い分けの法則について論じられている。また、Brown and Gilman (1960)、Laver (1981) などは地位、年齢、連帯関係が呼称選択に影響していると主張している。さらに、日中両言語においては、文化背景、言語意識などの違いによる呼称の使い分けは、外国語学習者の誤用や文化衝突と繋がっている (西 2012)。

本研究では、社会言語学と対照言語学の視点から、日中両言語における呼称表現についての対照研究を行った。本研究により、日中異文化交流において、呼称によって引き起こされる文化衝突を減らし、互いの理解を促し、交流を強め、より良い人間関係を構築することに役立つ。また、本研究によって導かれた呼称の使い分けなどの特徴は日中両言語の学習者が呼称の体系を学ぶ際に助けになると考えられる。

本研究は日中両国の総計 1525 人の母語話者を対象として、家族内、家族外、大学生活、職場環境など様々の場面を設定し、呼称の使用実態と使用意識に関するアンケート調査を実施した。調査から得られたデータを上下関係・親疎関係・性別などの観点から集計し分析し、日中両言語における呼称の使い分けの特徴を明らかにした。さらに、日中両言語の呼称表現を対照し、その類似点と相違点、およびその使い分けに関わる言語意識と文化的要因について考察した。

第一章では本研究の目的と構成について述べ、第二章では本研究の研究対象である呼称について、その定義や分類、機能について論じ、関連する先行研究を概観した。

第三章では、親族内における親子間、兄弟姉妹間、夫婦間の呼称について考察した。その結果、日中両言語の共通点として、目下の親族に対しては、「呼び捨て」、「愛称・あだ名」で呼びかけることが多いことが明らかになった。また、同世代の目上の親族に対しては、両言語とも名前で呼びかけることが可能である。

相違点に関しては、日本人は目下の親族に対して「親族呼称」で呼びかけることができないが、中国人は目下の親族に対しても「親族呼称」で呼びかけることができることが分かった。夫婦間の呼称に関して、日本語では家庭内の最年少者の立場から呼びかけているが、中国語では自分の立場から呼びかけている。また、中国人夫婦間の呼び合いが対称性を持つのに対し、日本人夫婦間の呼び合いは対称性を持っていないことが明らかになった。

第四章では、大学における先輩・同級生・後輩、教職員に対する呼称を上下関係・親疎関係・性差を要因として調査した。その結果、日本人大学生は親疎関係より上下関係を重視しているが、中国人大学生は上下関係より親疎関係を重視する傾向があると考えられる。さらに、中国語では、性差による呼称の変化がほとんどないが、日本語では相手の性別によって用いられる呼称が異なることが分かった。

また、日中両言語ともに教員に対して職業名を使用していることが分かった。職員に対する呼称については、日本人大学生は「ゼロ呼称」を選択して呼びかけることが殆どであるのに対し、中国語では事務職員に対しても「先生」という職業名が使用されている。また、中国語では、食堂・寮の職員に対して、親族呼称が使用されていることが分かった。

第五章では、職場における上司・同輩・部下に対する呼称を上下関係・親疎関係・年齢・性差を要因として考察した。共通点として、両言語では、上下関係、親疎関係、年齢、場面によって呼称が使い分けられていることが挙げられる。目上の上司に対しては、「役職名」類を使って呼びかけることが一般的であるのに対し、年下の同輩・部下に対しては「氏名」類が多く使用されていることが調査から明らかになった。

相違点としては次の点が明らかになった。日本語では「役職名」類の使用は目上の相手に限られ、同輩と部下に対して役職名類は使用されない。それに対して、中国語では、年上の相手に対して役職名類や氏名類に加えて、日本語では使わない「親族呼称」が多用されている。また、同輩と部下に対しても、「役職名」類が使用されている。

第六章では、親族呼称の虚構的用法について、呼びかける対象を親族内・親族外の「既知の人」と「未知の人」に分けて考察した。その結果、親族内において、日本語では親族呼称の第二の虚構的用法に使用制限がなく、目上、同輩、目下のいずれの相手に対しても使用できる。それに対して、中国語では親族呼称の第二の虚構的用法は目上の親族にしか使えない。

親族外において、既知の人に対しては、中国語での使用範囲が日本語より広いことが分かった。また、未知の人に対しては、両言語共に注意喚起句などの「ゼロ呼称」を使用する傾向があることが分かった。

第七章では、日中両言語呼称使用における相違点に注目し、両言語の呼称使用に影響している言語意識と文化的要因について考察し、「ゼロ呼称」、「おばさん」の意味機能、内外意識、上下意識などが呼称選択に影響していることが分かった。

第八章では、本研究の結論として日中両言語の呼称使用の特徴をまとめ、本研究で得られた知見を総括すると同時に、今後の課題と展望について述べた。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	劉 寧
論文審査担当者	(主査) 教授 後藤 斉 教授 小泉 政利 教授 才田 いずみ
論 文 名	日中両言語における呼称表現についての対照研究
<p>本論文は、多数の母語話者を対象としたアンケート調査をもとに、日中両言語における呼称の使い方の特徴を明らかにした研究である。</p> <p>論文は全8章から成る。第一章では本研究の目的と構成について述べ、第二章では本研究の研究対象である呼称について、その定義や分類、機能について論じ関連する先行研究を概観した。それを受けて、第三～五章では、日中両国の総計 1525 人の 母語話者を対象としてさまざまな場面を設定して行った、呼称の使用実態と意識に関するアンケート調査から得られたデータを、年齢、上下関係、親疎関係、性別などの観点から分析して、特徴を明らかにしている。第三章では、親子間、兄弟姉妹間、夫婦間の呼称について考察し、共通点と相違点を明らかにし、中でも中国人夫婦の呼び合いが対称性を持つのに対し、日本人夫婦間の呼び合いは対称性を持たないことを指摘した。第四章では、大学における先輩、同級生、後輩、教職員に対する呼称を考察し、日本人大学生が上下関係を重視するのに対し、中国人大学生は親疎関係を重視する傾向にあること、性差による変化が中国人と日本人で異なること、ゼロ呼称や親族呼称の使用でも違いがあることなどを示した。第五章では職場における呼称を考察し、中国語では同輩や部下に対しても役職名類が使用されること、親族呼称が多用されることなどを指摘した。第六章では親族呼称の虚構的用法について考察し、親族内においては中国語において第二種の虚構的用法の使用範囲が狭く、親族外の既知の人に対しては中国語で虚構的用法の使用範囲が広いことなどを指摘した。第七章では呼称使用に影響している言語意識と文化的要因について考察した。最後の第八章では、本研究の結論として日中両言語の呼称使用の特徴をまとめ、日本語と中国語のそれぞれについて呼称選択要因構図を作成して図式的に対照することにより、本研究で得られた知見を総括するとともに、今後の課題と展望について述べている。</p> <p>本研究では、アンケート調査の長所を生かして、さまざまな場面における多様な要因の観点から日中両言語の呼称使用の意識と実態を分析し、共通点と相違点を明らかにした。特に、中国語における親族呼称の虚構的用法の使用の範囲や日中両言語における性別要因の比重の違いなど、新しい知見をもたらしており、他言語の呼称を今後研究していくための手掛かりを提供するものになっている。場面や要因についてはここで取り上げられたもので尽くされているとは言えず、折角のデータを生かしきっていない点もあるなど、考察をより精緻で説得的なものにする余地は残っている。しかしながら、本研究で得られた知見は、日本語と中国語における呼称使用にまつわる要因に対する従来の理解を大きく進めたものであり、その成果は斯学の発展に寄与するものである。よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	